

技術革新とボランティア精神を生かした活性化を

昭和初期の日本は、アメリカ発の世界不況と旧平価による金解禁という政策の誤りによって大不況に陥り、農村では娘の身売りが続出するという苦境の中にあった。ここで、軍事力によって大陸の資源と市場を確保する以外に脱出する道はないと考えた人たちは、陸軍の一部が起こした満州事変を利用してそれを行おうとし、一時的には成功したが中国の強い抵抗に遭い、日中戦争は10年以上も続いた上に、最後には無残な結果に終わった。

一方、今の日本経済を見ると、耐久消費財の大量生産による高度成長は国内需要の飽和と新興工業国の低賃金のために期待できず、情報産業もソフトはアメリカの巨大企業に独占されている上に、少子高齢化のための財政赤字の増大は止まらない。この状況の中で金融緩和と財政支出の増加を続けても、所得格差は増大する一方なので一般国民の生活の苦しみは減らない。ここで高度成長時代の再現を夢見ることは、先進国が軍事力で好きなことをやれた時代は終わっていた世界の中でそれに頼ろうとした失敗を繰り返すだけとなろう。

今の日本に可能でありかつ望ましいことは、大量のエネルギーを投入して物資を大量に生産する産業技術に頼るのではなく、地球と生き物にやさしい技術を活かしながら、金銭的利益のためではなく人のために尽くそうとするボランティア精神にもとづいて、数値的な成長率は低くてもより心の満足を得られるような質的な成長を求めることである。

幸いなことに今の日本には、産業技術に替わって環境を浄化しながら農業、建築、医療健康などの生産性を上げるEM (Effective Microorganisms) という生物技術の製品と、その普及に努める30万のボランティアたちがいる(比嘉照夫「EM(有用微生物群)による福島放射能汚染対策の成果」本誌2014年冬季号No.200)。

EMに限らず、諸科学の進歩を活用して画期的な新製品やサービスを生み出すことによって日本と世界のために尽くすことは、日本人の独創性と人のために尽くそうとする伝統的な態度から見て決して不可能ではない(詳しくは、小金芳弘「ポスト産業文明のビジョン」本誌2013年冬季号No.196および「小金芳弘のホームページ」を参照されたい)。